

# 「インド太平洋」戦略の地政学

## 地域秩序の主体は誰か

菊池 努

Kikuchi Tsutomu

### はじめに

東南アジア諸国連合（ASEAN）の「インド太平洋」に関する見方（「アウトルック」）が2019年6月に示された。これで日・米・豪・印・中（中国は「インド太平洋」概念に警戒的だが、「21世紀海のシルクロード」構想は「中国版のインド太平洋構想」と言える）などが提示している構想や戦略を加えると、この地域の主要なプレーヤーのインド太平洋論が出そろった感がある。

各国の構想や戦略には、海洋の安全保障などの海洋への着目、インフラ整備や経済連携と連結性への関心などの類似点もあるが、地理的範囲や想定するメンバー、地域協力の原則などでの違いもある。ここでは、多様な構想や戦略が織りなす地域の国際関係を、この地域の秩序をめぐる競合、つまり米中基軸の秩序か、他の諸国も加えた「多極アジア」の秩序かという視点から素描したい。特に後者の動きに着目してみたい。

### 「米中基軸」vs「多極アジア」

米国防総省が本年6月に公表した「インド太平洋戦略報告書」の基調は、2018年11月のペンス副大統領による中国批判を引き継ぎ、アメリカを西太平洋から駆逐しようとする中国への警戒心である。この報告書は、中国は法の支配に基づく秩序の価値と原則を侵害する「修正主義国家」と断じ、中国は軍事力や経済力を駆使して短期的にはインド太平洋の地域覇権を、長期的にはグローバルな超大国になることを目指していると指摘している。

習近平国家主席の旗艦事業として中国が推進している「21世紀海のシルクロード」構想の主要な対象は南アジアや東南アジアの諸国である。中国はこの地域の港湾や鉄道、道路などのインフラ整備を通じて中国主導の巨大経済圏の建設を目指していると言われる。この構想の背後にあるのは、アメリカとの競争、対抗である。中国は近年、周辺諸国との関係強化を目指す「周辺外交」を積極化しているが、そこでも中国の念頭にあるのは、周辺諸国へのアメリカの影響力拡大への懸念である。

米中いずれもインド太平洋を米中対決の場とみる傾向が顕著であり、アジア各国への政策は米中対立への対応という側面が強い。それぞれの対米、対中政策の派生として各国への政策が位置づけられる傾向が強い。

こうした見方は、国際政治学者が指摘する「パワー・トランジション」の議論と符合する。近年、国際政治学者が注目してきたのは、中国の台頭に伴う、アジアでの地域覇権をめぐる米中対立というシナリオである。ここでは、米中二国間関係の動向がアジア地域の国際関係の基本構造を規定するとされる。米中基軸のアジアの地域秩序論である。他のアジア諸国の役割は限定的である。

米中の対立が激化するなかで、米中関係の動向でこの地域の地域秩序が形成されることへの警戒感もある。インドやASEANの「インド太平洋」についての構想や認識には、そうした懸念が反映されている。これらの諸国は、米中基軸の地域秩序が自らの行動の幅と政策の選択肢を制約することを懸念している。また、今後の政策展開に不透明性が残る米中二国の関係に地域の将来を委ねるリスクも認識している。

日本やオーストラリアはアメリカの同盟国として、アメリカのインド太平洋戦略に協調しつつも、対中政策やこの地域の貿易秩序のあり方をはじめとする個別の政策では必ずしも政策が一致しているわけではない。また、両国にもこの地域の国際関係が米中関係を基軸に形成され、自国の運命が米中関係の動向で決められてしまうことへの懸念がある。

日本、インド、オーストラリアなどの諸国やASEANは単独では秩序形成の主体にはなりえないが、一定の国力をもち、今後さらに国力を増大させる潜在力をもち、重要な戦略的要衝に位置し、この地域の国際関係の形成に主体的かつ能動的に関与しようとしている。これらの諸国にとっては、自らの行動の余地を広める「多極アジア」が望ましい。

## 「多極アジア」のためのインド太平洋構想

### (1) インドの「アクト・イースト (Act East)」政策とインド太平洋

インド外交が能動的である。とりわけ現モディ政権は「アクト・イースト」政策を掲げ、インド太平洋の国際政治経済への関与を強めている。インドにとって、米中いずれの単独覇権も好ましくない。また、対立であれ協調であれ、米中二国間関係が地域秩序の基盤となることにインドは警戒的である。いずれもインドの対外政策の自由度を制約し、戦略的自律を損なうからである。

2018年のシャングリラ・ダイアローグ（アジア安全保障会議）で、モディ首相は「開かれた、包摂的なインド太平洋」の構想を提唱した。ここでの「包摂的」とは、米中両国の構想が内包する米中基軸論へのインドの警戒心を反映したものとみることができる。中国に敵対的で、中国を排除したアメリカの戦略に巻き込まれるのを回避する

と同時に、アジアにおけるアメリカの影響力の低下を狙って「アジア人によるアジア」を唱える中国に対し、アメリカのアジアへの継続的関与の余地を残そうとしたものであろう。

インドは冷戦終結後のアメリカの一極構造と言われる世界で、「多極世界」の実現を目指して中国やロシアなど新興諸国との連携を深めた。インドにとって、アメリカの力が低下し、「国際関係の民主化」を目指す新興諸国の力が増大することが望ましかった。この点で、2008年のアメリカを起源とする世界的な経済危機とこれとは対照的な新興諸国経済の着実な発展は、「多極世界」を目指すインドにとって望ましい展開であった。

しかし、米中双方に対するインドの認識と姿勢はその後変わる。アメリカの力とアジアへの関与の低下と中国の力の台頭は、「多極世界」を導くのではなく、中国の地域覇権の形成という結果になりかねなかった。実際、アメリカの経済危機をひとつの契機にして中国の攻撃的な対外行動が目立つようになり、中国の地域覇権への取り組みが本格化してきたと考えられた。また、「一帯一路」構想や貿易を通じてインド洋諸国への中国の進出が拡大し、中国による「インド包囲網」の形成への懸念がインドの政策コミュニティのなかで表明されるようになる。中国へのインドの警戒心は強まる。

インドは台頭する新興国だが、中国との国力の格差は拡大している。この状況は当面変わらない。インドが単独で中国に対応することはもはや困難になっている。インドにとって、これまでのようにアメリカなど域外国のインド洋への進出に抵抗するよりも、域外国と協力して中国の進出に対処する以外に方策はない。インドには非同盟の理想主義がまだまだ色濃く残るが、この現実主義的認識がモディ政権とそれ以前の政権との顕著な違いである。

皮肉なことに、「多極アジア」を実現するために中国と連携し、アメリカに抵抗してきたインドは今日、中国の地域覇権を阻止し、「多極アジア」を実現するためにアメリカとの連携を模索している。米印両国の「インド太平洋」概念は異なるが、インドのこの現実主義こそが米印協力を促進し、米印間の安保協力は大きく前進した。

ただ、インドの対米姿勢は慎重である。インドにはアメリカに対する根強い不信感が存在するし、アメリカとの協力を進める結果、アメリカの対中戦略に巻き込まれることへの懸念も強い。

確かにインドの役割を高く評価するアメリカのインド太平洋戦略は、米印協力を拡大進化させる効果をもつ。しかしインドは、それによってアメリカの対中戦略に組み込まれ、中国との関係を悪化させ、自国の対外行動の自由を喪失するのは避けたい。「戦略的自律」は依然としてインドの対外行動の指針である。

アメリカとの関係を強化しつつ、アメリカの戦略に全面的に巻き込まれるのを回避

し、「戦略的自律」を確保するためにインドが推進しているのが、日本やオーストラリア、ASEAN諸国との連携の強化である。インドは経済や安全保障の分野で、これらの諸国との二国間、三国間の協力を拡大している。また近年では、インド洋諸国との関係強化、ベンガル湾地域への新たな協力推進の動きなど、インド版周辺外交を積極化している。米中関係の外に新しいインド太平洋の国際関係を創出しようとしている。

## (2) ASEANのインド太平洋概念とASEANの中心性 (ASEAN Centrality)

本年6月の首脳会議でASEANが採択した「アウトルック」のなかで、ASEANが最も強調したのは、「ASEANの中心性」を堅持することである。「ASEANの中心性」を強調した目的は、一般に指摘されている、ASEANがこの地域の国際関係で中心的役割を担うという意味ではなく、大国政治、特に米中関係に特化した米中冷戦や米中共同統治体制 (G2) などの言説が関心を呼ぶなかで、米中関係を越えた地域秩序の言説を浸透させようという狙いがある。

確かにASEAN諸国は、主要国の「インド太平洋」戦略や構想に懸念を表明してきた。中国への対決姿勢やASEANの一体性維持への悪影響をASEAN諸国は不安視してきた。冷戦後ASEANは、ASEAN地域フォーラム (ARF) や東アジア首脳会議 (EAS) など、多様な地域制度の形成と運用に主要な役割を担ってきた。そうしたASEANの役割が大国間の競争と対抗の激化によって弱まることへの懸念がある。

ASEAN諸国の間には、「自律」や「自主」への強い希求がある。彼らは大国間関係の激変による困難も経験した。大国間関係の推移に国家の運命を翻弄されてきた。対立であれ協調であれ、大国政治によって自らの運命を決定されることへの強い警戒心がASEAN諸国の間にはある。

ASEAN諸国にとって、米中の中で「グランド・バーゲン」がなされ、アジアにG2が形成されることも、逆に、米中間の利害対立が激化し、冷戦期の米ソ関係のような緊張が生まれるのも好ましくない。どちらにせよ、東南アジア諸国の運命が再び大国間関係によって規定されてしまうからである。

彼らにとって望ましいシナリオは、米中を含む主要大国が適度な緊張をはらみつつ、決定的な対立に至らず、また大国協調の仕組みも形成されず、ASEAN諸国が主要大国との間に安定した関係を築き、ASEANもアジアの国際関係のなかで有力なプレーヤーとしての役割を担うことである。主要大国をASEANが中心になって作り上げてきた地域制度に組み入れ、相互の牽制と自制を求め、ASEANの役割を高めることである。「多極アジア」はASEANの望ましいインド太平洋のシナリオである。

米中の緊張が激化する今日、ASEANは米中基軸の地域秩序論に代わる新たな取り組みを始めている。日本やインド、オーストラリアなどとの連携を一段と強めている。日本との間では経済はもとより、安全保障や法の支配強化のための協力を拡大し

ている。インフラ整備においても日本は、過度の中国依存を避けようという ASEAN 諸国の受け皿となっている。インドやオーストラリアとの間でも近年、ASEANは個別の首脳会議を開催し、ASEANの中心性への支持を確保するなど、対外関係のすそ野を拡大し、大国政治に埋没するリスクを回避しようとしている。

### 同盟を補完し、同盟を超えるインド太平洋戦略——日本とオーストラリア

日本のインド太平洋戦略には2つの側面がある。ひとつは日米同盟の強化である。日本は安全保障分野での取り組みを近年積極化している。特に2012年末に発足した第2次安倍晋三内閣のもとで、集団的自衛権に関する歴代政権の憲法解釈を変更し、安全保障関連法制を制定し、米軍と自衛隊との防衛協力の余地を拡大した。また、日米防衛協力の円滑な運用のために日米防衛協力のガイドラインを改訂した。

従来日米同盟を強化する措置はアメリカ側のイニシアティブで行なわれることが多かったが、近年の特徴は、日本側の能動性である。日本の姿勢の背後に中国への懸念があることは確かだが、同時に、アジアにおけるアメリカの役割やアメリカによる対日防衛コミットメントに対する不安が日本側に芽生えつつあるように思われる。確かに日本は「Gゼロの時代」の到来に最も敏感に反応してきた国のひとつである。

アメリカの国内政治の分断、国民の内向き志向、同盟を軽視する指導者の登場などを念頭におくと、アメリカの対日防衛義務の履行に日本が一抹の不安をもっても不思議ではない。アメリカにとって同盟の信頼性は重要だが、対日防衛義務を履行するとは、かつてよりはるかに強大な力をもつようになった中国との戦争を覚悟するということである。大きな決断である。「人の住まない島」の防衛でアメリカの決意が揺らぐことはないのか、一抹の不安が日本のなかに生まれている。

自国の安全保障の危機に際して確実にアメリカの支援を確保する関係を築いておくことが日本の至上命題である。日本は今、戦後のオーストラリアがそうであったように、自国がアメリカの信頼できる同盟国であることをアメリカの政府と国民に印象づけるための努力の必要性を再認識し、具体的な措置を講じているということであろう。

日本のインド太平洋戦略のもうひとつの側面は、「新南進論」とも呼ぶべき東南アジアやインド洋、オセアニア諸国との経済、安全保障、インフラ建設など多面的な分野での連携の強化である。この背景には、この地域で果たしてきたアメリカの役割を補完する側面と、これらの諸国との関係強化を通じて、アジアへのアメリカの関与をより確実なものにできるとの期待がある。「環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定 (CPTPP)」や「日米豪印4カ国の対話 (QUAD)」はそうした日本の努力の一環である。

その一方で日本は、対立であれ協調であれ、米中基軸の地域秩序には警戒的であ

る。アメリカのインド太平洋戦略を日本は全面的に支持しているわけではない。アメリカの対中貿易措置は日本にとって重要な国際自由貿易体制を弱体化させ、日本経済に打撃を与えている。アメリカとの関係を強化しつつ、米中対立に巻き込まれる事態を日本は避けなければならない。インドやオーストラリア、ASEANとの関係強化は、この地域の国際関係を米中二国間関係を越えた多層重層的なものにし、日本の外交空間を拡大する機能が期待できる。

オーストラリアは「インド太平洋」概念を最初に採用した国のひとつだが、日本同様、アメリカとの同盟関係を強化しつつ、インドやASEAN諸国との関係強化を進めている。また、中国との安定した関係を模索している。オーストラリアのなかには、この地域の将来を米中関係を軸に展望する意見もあるが、政府が2018年公表した外交白書のなかで示唆されているように、オーストラリアにとってインド太平洋の国際関係は米中関係に還元されるものではない。より多層で多元的な地域秩序のなかでオーストラリアも平和と繁栄の道を模索している。

米中関係が緊張の度を増している今日、米中関係に関心が集まるのは当然である。しかし同時に、「インド太平洋」戦略や構想の背後には、米中関係を越えた秩序形成を追求する動きがある。緻密なバランスと微妙なニュアンスを必要とするこの動きの帰趨は判然としないが、日本の平和と繁栄に直結しているこの動きを引き続き注視したい。

---

きくち・つとむ 青山学院大学教授／  
日本国際問題研究所上席客員研究員